

1 月第 4 週の礼拝説教

■日 時：2026 年 1 月 25 日（日）10：30～11：30 降誕節第 5 主日礼拝

■説 教：保科けい子牧師

■聖 書：新約：マルコによる福音書 1 章 21～28 節（新約 P62）

■説教題：「権威ある新しい教え」

■讃美歌：56（主よ、いのちのパンをさき）
402（いともとうとき イエスの恵み、）

2026年になって、1月の11日の第二の主日礼拝から、日本基督教団の聖書日課の福音書はマルコによる福音書が選ばれています。これは、2025年度の最後の主日3月29日の「棕櫚の主日」まで続いています。1月11日にはヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けるという箇所を取り上げ、この世に現れた主イエスの公生涯がどのような形で始まったかということをご一緒に確認いたしました。では、マルコによる福音書は最初にどのような言葉で語り出されているかというと、1章1節で「神の子イエス・キリストの福音の初め」と記されています。つまり、4つの福音書の中で最初にまとめられたと言われているマルコによる福音書は、「神の子イエス・キリスト」という言葉で、イエス・キリストはどのようなお方であるかということを明確に打ち出し、その方がどのような言動をなされようとしたのかを「福音の初め」という言葉で明らかにしているということができます。それらのことをあなたは信じるか、という問いかけをもって、マルコによる福音書は私たちに迫ってきているということができます。すでに語ってきたことですが、主イエスは誕生からおよそ30年ぐらいたってから、ガリラヤのナザレから出て来て、ヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けられました。その時、神の霊が主イエスに降り「『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』」という声が、天から聞こえた。」と1章11節で記されています。そして主イエスは、荒野でサタンの誘惑を受けた後、ガリラヤに行き、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と第一声を挙げ、四人の漁師を弟子として神の救いの福音宣教活動を開始します。本日の聖書箇所の「汚れた霊に取りつかれた男をいやす」出来事は、マルコによる福音書の著者が、主イエスを神の子としての権威を持つお方として描いた最初の場面です。

21節は「一行はカファルナウムに着いた」と書き出されています。カファルナウムはガリラヤ湖の北の岸辺の町で、主イエスの最初の弟子となったシモンとアンデレの家がそこにありました。主イエスの一行はその家に滞在したのです。次の段落の書き出しである29節を読みますとそのことが分かります。カファルナウムのこの家が、主イエスのガリラヤにおける伝道の拠点となりました。しかし、主イエスはこの家に人々を集めてそこで伝道をしようとしたものではありません。21節の後半に「イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた」とあるように、安息日に会堂で教えることによって宣教活動が開始されたのです。この箇所の元の言葉をみると、「そしてすぐに」という言葉があります。以前の口語訳聖書では、21節を「それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日にすぐ、イエスは会堂にはいって教えられた」と訳されていました。この「すぐに」という言葉は、マルコによる福音書で17回も用いられている特徴的な言葉です。ここでは、四人の漁師を弟子として連れてカファルナウムに入り、いろいろ準備を整えてからというのではなくて、すぐに伝道を始めたのです。それは、「時は満ち、神の国は近づいた。」と主イエスが既に語られているように、神の国が近づいているからです。主イエスがカファルナウムの会堂でお語りになったことが具体的には何だったかをマルコによる福音書は記していません。しかし、それは既に15節に語られていた「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音

を信じなさい」ということを、カファルナウムの会堂でも語られたのだと思います。主イエスは「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった」ので、人々は非常に驚きます。おそらく当時の律法学者たちは、先人の伝統的な教えに倣って語っていたのでしょう。しかし、主イエスは、神の子として権威をもって、これまで語られなかった神の救いについての新しい教えを、力強く語ったのではないかと思います。つまり主イエスの教えは、律法にこう教えられているから、聖書のどこの箇所にもこのように語られているから、というような従来のもものではなかったのです。そのために人々は驚いたのです。

そして、23 節には「そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。」と記されています。ここでの「そのとき」は、先ほどお話ししました 21 節の後半の元の言葉にある「すぐに」と同じ言葉です。そのことを踏まえてその場の状況を考えてみます。主イエスが権威ある者としてお語りになり、人々は非常に驚いています。それと同時に、一人の男が叫び出したのです。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしにきたのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」と叫びます。口語訳聖書では、ここは「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです」となっていました。こちらの方が元の言葉に忠実です。「あなたとは係わりになりたくない」、すなわち、かまって欲しくない、ほっといてくれ、と彼は叫んでいるのです。ある方は、この場面を、「主イエスが、権威ある者としてお語りになる時、驚きと共にこういう反応が生じます。あなたはこのままでよいのか、と問われ、悔い改めを求められ、それを通して救いへの招きが語られる時、『かまわないでくれ、ほっといてくれ』という思いが、つまり主イエスの権威ある言葉に反発し、敵対する思いが、私たちの中にも生じるのです。」と解説しています。それに対して、主イエスは「黙れ、この人から出て行け」と叱りつけ、悪霊は男から出て行きます。この出来事によって、人々は、主イエスが教えすなわちみ言葉においても、汚れた霊に取りつかれた男と正面から対峙し叱りつけるというみ業においても、神の子としての霊的な力を持つお方であることを確信するのです。

最後に、27 節、28 節を読みます。「人々は皆驚いて、論じ合った。『これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。』」28 イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。」と記されています。ここでまた、人々が皆驚いている様子が繰り返されています。驚くというのは、それまで全く知らなかった、聞いたことのなかったようなことが示されたから、起こってくる反応です。自分が既に知っていること、分かっていること、理解していることを超えた新しいことが、今や神様によって引き起こされようとしている、ということです。主イエスのお語りになった福音、それはそのようなものであったのです。その福音は今もなお、私たちに語り続けられています。日常の小さな出来事一つの中にも、主なる神様の力が働いているということに、私たちはいつでも驚きをもって応答していきたいと思います。